

2022年(R4年)



No. 366

ひとはつうしん

(字:水田淳世)



社会福祉法人 ひとは福社会
〒739-1203
広島県安芸高田市向原町長田1857番地
TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

(ホ-ムペ-ジ) http://hitoha-fukushi.com (メ-ルアド) honbu@hitoha-fukushi.com

天高く馬肥ゆる秋、今年も秋の味覚、自然の恵みに舌鼓の季節がやってきました。

季節は秋ですが、少し時間を巻き戻して、くらむほんでの夏休み期間のことを報告したいと思

ます。1学期の終盤、有り余るエネルギーを発散するかのよう建物内をにぎやかに走り回り、時に

粗暴な行動が見られる子ども達の姿が多くありました。私達スタッフからは、子ども達の行動に制止、

制約の声掛けが自然と多くなっていたかと思ひます。夏休みを迎えるにあたって、スタッフでコロナ禍

にあっても子ども達が楽しめる活動、夢中になれる遊び、思い出に残る夏とするために(はと話し合

いました。その中で、24年前に発行された『お〜い聴こえますか』50ページに掲載されている「Sくんの

仕事を考えちゃうんが寺尾さんの仕事じゃろうかい」の一文が頭に浮かびました。子ども達からすると

「僕達にはするな、これもするな(ばかり言うんじやなくて、僕らが夢中になれて、楽しめる遊びを考えてくれる

のがスタッフじゃないの?」といったところでしょうか。そこで、スタッフで知恵を絞り、敷地内に砂場を

作り、野球が好きな子が増えてきたので、ミニバッティングセンターを整備したりと、子ども達の新たな好奇

心に沿った遊具を用意しました。暑い中でも熱心にバットを振る子ども達、砂場遊びを友達と楽しむ姿

に、活動素材を探求する大切さ、そして子ども達と共に私達も成長を実感できた思い出深い夏休

みとなりました。(児童部門 佐竹正充)

※Sくん: 中田沙登志さん。『お〜い聴こえますか』発行当時は、あだ名で呼んだり、くん呼び、ちゃん呼びをしたりしていました。活動を共にしていく中で、障害の有無に関わらず、一人の人間としての尊厳を大切にすため、現在では〇〇さんと呼ぶことを基本としています。

お知らせ 年に一度、9月号を特別版として発行し、その他の月はこれまで通り、手書きのつうしんでお届けします(1月号は年賀状)。来年以上降の参考にさせていただきますので、9月号に閣してご意見等ありましたら、編集委員までお寄せください。

広島国際大学3年生が作業所で実習されました。

○大下晶さん

言葉が足りない中でのコミュニケーションは難しいと感じましたが、その中でも、河野崇史さんと折鶴解体

の作業を一緒にして「そのままカゴに入れてくださいね」と言うと、破らずに入れられていたので「伝わっている」

と分かった瞬間が嬉しかったです。職員の方を見て、自分もやり取りができるようになれたかなと思

います。あの行動はこういう理由なのかなとくみ取るのが大切だと学びました。

スタッフ 佐々木美春より: 河野さんが大下さんと作業している様子を見ると、いつもよりやる気が出ているなと感じました。声掛けが優しくなったのもあるようです。私は名前を覚えてもらおうと、河野さんの横で大下さんの名前を囁いていました。

○増元奎京さん

休憩時間に福間さんが椅子からずれ落ちそうになっているところに、末田さんがボールを持ってきて「遊ぼう」と声をかけていたり、奥田さんの車椅子を押したりと、気遣いのできる末田さんの人間性がいいなと思

ました。これまで障害のある方と関わったことがなく、実習して気づくことがたくさんありました。

スタッフ 加納吉大より: モップがけをしている時に、ペアの平岡さんがすぐに座り込んでしまいました。声をかけても反応がなく、戸惑って一緒に座っているように見えたが、平岡さんの「やろう」という気持ちを引き出すためにはどうすればいいか考えながら声掛けをされていました。増元さんは人の良いところに目を向けられる人だなと思います。

大学の先生がひとはと連携をとられ、実習先が決まったそうです。先生に「いいところよ」と奮められたと話されました。お二人とも安芸高田市の出身です。

お礼 岩森さん、9/21 中国新聞への投稿ありがとうございました。

「しんころあきやくちえいこさん」

ひとはの日々の依頼に、さて困ったぞと外を見ると、作業所の小野さんが「ごめん
なさい」と言いながら、手で作ったバツテンを車に向けていた。クラクションを鳴ら
したようで、「ごめん」と言う表情は笑顔だった。自閉症の方は、表情と感情が
必ずしも一致しないことがある。

そんな彼は会うと必ず「しんころあきやくちえいこさん」と声をかけてくれ、ハイタッチ
を交わす習慣がある(他に「ざ、ころん、ついきさん」「しんころーおかがわーてんわーと
みさん」と呼んでいるよう)。一見「無表情」だが、タッチの重さで感情が分かるとき
がある。それなりに長い付き合い、これからもよろしくお願ひします。

(相談支援事業所 もせい 矢口 詠依子)

「私がやる！」

自販機補充作業でのこと。福岡さんから補充担当の人に渡してもらおうとスタッフが
ジュースを手渡すと、1歩、2歩と歩み寄って自分で補充しようとしてくれました。作業を始
めた頃には、ジュースを受け取るまでに時間を要することもありましたが、今では受け取
たものを入れるのは私の仕事! という気持ちを持ってきています。一緒に活動をして
5年。少しずつ少しずつ前に進んでいくんだと教えてくれたのは福岡さんです。

(ひとは作業所 加納 吉大)

「本物に触れ...捕まる」

長い夏休みの間、ひとはほろこではたくさんの体験をしました。中でも防犯
教室は、地域のおまわりさんに自分の身を守るための合言葉を教えてもらったり、
なんと持ち物を触らせていただいたり。手帳や手錠、警棒など、子どもたちは興味
津々で見入っていました。それから当分の間、警察ごっこがゲームになり、「タイホ
だ」「タイホだ」とスタッフを追いかけ、新聞紙で作った手錠で捕まるという
遊びをしています。「いっぱい食べた罪だ〜」と私はすぐに捕まります。

(ひとはほろこ 松浦 望)

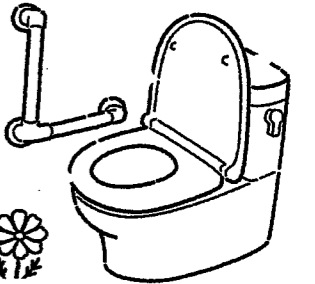
語り継ぎたいこと — ころえ帖 改訂版 —

支援とは あなたと私の協働関係

本人が「しよう」という意欲をもつためにはどうしたらよいのでしょうか。「あな
たが必要」、「あなたならできる」、集団の中であるいは個別に、本人の役割と本人へ
の信頼というメッセージが伝わることによって、心の中の主体的な動きが始動しま
す。そして、その動きが感知できた時、共感と感動が生まれ、気づかないうちに相互
に人格陶冶もなされていくのだろうと思います。まさに支援とは協働で創り上げて
いくものだということを実感することができるでしょう。

— 作業所トイレ改修 —

建物ができて27年。洋式トイレにきららとスタッフ2人で入るには窮屈、
アコーディオンカーテンでプライバシーが守られていないなどの課題があり、5年前から
改修の構想が始まりました。業者による暑い中での解体作業、車椅子でトイレに入る
人に手すりの位置の意見をもらったり、壁や床のデザインを選んだりして完成! トイレが
計6か所あり、きららに「どれがいい?」と尋ねると一通りじっくり見ており、選べ
られるのも良い点です。行きたい!と思えるトイレになりました。



編集後記

学生の頃は読書が好きでよく書店に通っていたが、社会人にな
ってからは忙しいことを理由にだんだんと本から離れていった。
読みたいと思って買った本も、開かないまま「積読」してしまっ
ている。時々本を片手に外へ出かけ、読書の時間を作って読むように
している。今年の秋はそんな時間をたくさん持てるといい。

(白井 くみこ)